すみだはし

建

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常ニ芭蕉の軒
ありよひ風の窓をひらき心の泉をくみとりて
誹かりて乃文字の野風をさけてあへる其草也　家
語りをとの誹まとも教への二三子席に侍て
火桶によりし炭をおとす菴をこれかれとほのけ
家人の手龜（カヽ）らすといへる菜児をんとせしおり着
に襭（シキ）のさしやうのちらと竪にをさき横にするして

今度の松乃古にたよる舞と云よりまろひいつる
あふ乃をふりの耳に入たるをうつろふのめ鶯乃め
ぐしの足と混のすりりめちかまやこれをさひ立はるの
日乃いつと出しより秋乃月にしらか海当川く
や吟詠り篇をもりて貴によりつちの二まわり
わのつくらんとをひらきみるに有竜の様をあやとり
ねきむれを文くねき炭の筋みそめりをさしきと
號名をとかく附侍りハ詩の正なといつる五行の志な

詞ハやまと乃をしへのみちハいつはらぬを例の口に
任せたるをもおもはす窓によりて雨あかりつる中なりし
ひと日芭蕉翁の首途にや川づれあそびを携へて
両翁の話を聞けば此集の事に及びてその名を
穐の夜より火桶の下(モト)によりくぬぎ炭の名を
哥とうちすしつるうつりて炭たはらといつるハ誹也
名をと行こちしたるを小家やをりてましくおもひ
これや此志をえらぬ媒と成よるこの心ありて

其かみ序かきてよと云捨てけるを今此事を
ゆうかへ其初をおりふて頭書をのつのりひと有り
作りよ矢をつくる妓よはあらしうしと名ちを
作くむ

元禄七の年夏閏さつき初三乃日素龍書

誹諧炭俵集上巻

むめがゝにのつと日の出る山路かな　芭蕉
処〻に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　仝
上のたよりにあがる米の値　芭蕉
宵の内はら〳〵とせし月の雲　仝
藪越はなすあきのさびしき　野坡

ウ
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

ちつと又宗鑑下地蔵て見ん隣　野坡

家をおまり居合ひとぬき　芭蕉

町衆のつらりと酔て花の陰　野坡

門て押るゝ壬生の念仏　芭蕉

東風々に糞(コイ)のいきれを吹まはし　仝

多みるまゝに肱わすらぬ　野坡

江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉

こ地(ち)にもいれどから臼をかす　野坡

方々に十夜の内のかねの音　芭蕉

桐の木高く月さゆる也　野坡

門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉

ひらふた金て表具さす頃　野坡

ちつ年より女房のおやを振舞て　芭蕉

又この春も済ぬ牢人　野坡

法印の湯治を送る岨づたひ　芭蕉

なハ手を下(リ)りて青麦の出来　野坡

ウ

と君家も東乃方に窓をあけ　野坡

奥に谷河し大やの雑家　芭蕉

千鳥啼一聲しは宵なれ　野坡

木曽君高乃をてぬ無用　芭蕉

端へ君知らせず嫁を連て来て　野坡

屏風乃陰にみゆるくりし盥　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花さかり　嵐雪

あさみや苣に雀鮨もる　利牛

片肌は春乃小袖をぬきかけて　野坡

舟をはなしに圍ふ相撲場　嵐雪

細々と朔日ころ乃宵の月　利牛

早稲も晩稲もお生に出る　野坡

泥染を長き流れ乃のばすらん　嵐雪

あちこちほれた盃まはる　利牛

談より若き嫁を呼り来隣　野坡

てうしくしくも参らすいわゐ　嵐雪

黒谷乃九ちを墨読聖護院　利牛

五百のか布を二度に元ゝめ　野坡

綱めき乃いかに長ある雪の文　嵐雪

人まさかはらぬ松黒むし　利牛

雑役乃鞍を下せば日のくれる　野坡
飯貴中なる畢をみる月　嵐雪
漸と雨降やみてあきの風　利牛
鶏乃みくハ又鮮なく　野坡
名
奉公乃くるしき顔に墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子乃小便を浴　利牛
くわらりと河内乃荷物送り出　野坡
心みる涌し　着物せん亀く　嵐雪

婿が来て姫君世とも成にけり　利牛
ことし乃かれそ何も節ハなき　野坡
金仏乃西むかひそくをさすゝる　嵐雪
ひらいわい乃小鳥皆よ気　利牛
黍若穂も秋乃風に吹倒き　野坡
手習乃窓噂乃語りすむ月　嵐雪
歩きさし江戸て人になる　利牛
今井庄や君乃ハ深とゆる　野坡

賣手もうつてみせけりたゝき納豆　嵐雪
はらはらと雪のふり出し　利牛
鎌倉乃便手つのせにまかせける　野坡
のしこ宿岩志まぬ雨引　嵐雪
嫁あるゝ母をほめて留守の陰　利牛
まさゑ乃くるゝ正月乃膳　野坡

ふゆの川午　よのやて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほど乃雨降て　岱水
そつと乃ぞけば酒乃最中　利牛
寝処に誰もねぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀乃ころぶあきかぜ　孤屋

ウ
きりぎりす薪乃下より鳴出して　利牛
晩乃仕事乃工夫するなり　岱水
妹をよい処からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらす啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出す　孤屋

こ乃春ハ盧同が男居なる　利牛
うれしく板を今に拂して　岱水
雪乃跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸けてものおもひゐる　芭蕉
不届な隣と中のわるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらす　利牛
泣事のひそかに出来し浅ぢふに　芭蕉
置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋

着のまゝにすくんでねれバ汗をかき　利牛
客を送りて提る燭台　岱水
今乃まに雪乃厚さを指てみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災ニ祖父乃しらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕乃照り　利牛
名月のまにあハせ度芋畑　芭蕉
すたすたいふて荷ぬ落鮎　孤屋

このころは宿の通りもうすさびし　利牛

山乃根際の鉦かすかなり　岱水

よこ雲にそよ〱風乃吹出して　孤屋

晒乃上にひばり囀る　利牛

花見にとめ子どもばかりつれ立て　芭蕉

余乃くさなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉
孤屋
岱水
利牛

各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛

岸のいばらの真白に咲　野坡

雨あかり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋

与力町よりむかふ西風　利牛

竿竹に茶色の紬たぐりよせ　野坡

馬の離れてわめく人声　孤屋

暮の月干葉の茹汁わるくさし　利牛

掃えぬうち櫃ちらし　野坡

ちゞめむ乃中でよわ出るわ保あるの　孤屋

塩をするれとや鯖わ仁辛し　利牛

松坂や矢川へもいねうら通わ　野坡

喚ても勝をつき関貝表　孤屋

十二三弁の夜さの折かへし　利牛

本堂はしらちりてくずし　野坡

堂

日乃あたる方ハあかるき竹乃色　孤屋
只奇麗さに口すくふ　利牛
近江路乃うらの額を吟て　野坡
天気の相よ三ヶの月乃照　孤屋
生なりに打色ひしと凌　利牛
椋乃実落る屋ねくさるなし　野坡
帯売乃房か連立宿かわ　孤屋
洗濯ころ乃人見えそて　利牛

連

はかしと二日灸のいほひ出　野坡
ほろくと児ん猿にとほうし　孤屋
なかひ袖を振てみするもおかしひ　利牛
雁羽乃糸もよれつます繰　野坡
暮くて西国武士の荷のつゝき　孤屋
尚あ乃わらわ今りそ大旱（テリ）　利牛
切蛆（ウヂ）の喰倒しよる植たはこ　野坡
くゝり納戸を伏色房庵　孤屋

瘧日をまきしこまとも結ぶらん　利牛

着てすけたる紬の重ね　野坡

里あひの名をやしはれける　孤屋

となりの裏は葺き井乃本　利牛

かれは月横又負東る枝　野坡

すいきの長はあめるこつて　孤屋

ひつそりと息をとめたる津書　利牛

戸でからみても風呂の屋根　野坡

伐送る根と椿乃茎あひて　孤屋

赤い小家をあらし手間　利牛

湯をとを宿は男の節をうえ　野坡

師走比丘尼の諷(ウタ)乃まはよ　孤屋

餅搗の臼を手て貸ふるて　利牛

天満は燃をみこれなり　野坡

廣袖をうへにひつぱる舩の者　孤屋

むし紀にして来ぬ鰹ある　利牛

燃しける薪を尻手に指くべて　野坡

中四五反乃本わまはしする　孤屋

月花にかきあけ城乃跡はかり　利牛

弦打嵐依雲乃様　孤屋

挟蟷螂能らいこそ庭に紀かり　野坡

小屋出んちんの車輪しく　利牛

振鑿に膝すゝ足をなけ出て　孤屋

鍋出ん錆うけを念入てみる　野坡

麦畑乃替地に渡る傍示杭　利牛

賣手も志らす新改先筆　孤屋

抱姥も子持になれハたくましに　野坡

又依扇出ん古足いくしき　利牛

旅まち出ん人にとられた二番続　孤屋

冬をえんうて寐しすりちわ　野坡

薄雪出んこまらん和まを運出し　利牛

一つなり牛繩乃雲猫　孤屋

秋はしに荻引ちらす船乃月　野坡
なまなかむすめ乃嫁あはひ　利牛
三ウ
めを隠て無理に呼はる腰のあら　孤屋
又たのみして美濃たよりまし　野坡
かくはすに中気己乃足をまはし　利牛
入ますの人に味噌豆を出し　孤屋
すちのひに木綿綛乃新田川　野坡
は茶屋乃みなくる音乃こつき　利牛

ほや〳〵とえどほこらすみちぎれ　孤屋
衣裳り縁ましる熱汁　野坡
茶乃内引詰て居る欅原　利牛
尾張千はる返す咲よし　孤屋
おちうろうそくは乃面光る　野坡
入あてく月乃六月　利牛
挿ミてお上ミ出羽なれひかけら　孤屋
当ミつのす詞のうら　このひ　野坡

海

名 大和乃あぐらに袖の汐のみて　利牛
何年を抱しもぬ堀の末　孤屋
家並に弓門心乃あるを跡　野坡
九月十日酒盛わけらふ　利牛
挟おもちて立かたにめつらし　孤屋
足なし蓬藜より借にまゐる　野坡
里離れ頃乳引乃おがつきて　利牛
やかましものを嫌乃襟もと　孤屋

亭

穿にかる翔の志まの精を着　野坡
うんち果てる八重の気　利牛
丁亭に仙郷儀乃口のかわ　孤屋
祈祈の海で大手になる筋　野坡
夕月に鷲寄見あそびあそび　利牛
色て底れ鯱乃やきもの　孤屋
名ウ 空免を今年見風よ頼ほせ　野坡
もえや仕るしもなりぬあらん人　利牛

呉の病(ヤミ)若斗大事をうくる法の前　孤屋

毎月ぶかけてこゆる逢坂　野坡

獄もさぬ細取庭の世の浅ましさ　利牛

門建果て町の大湊　孤屋

彼岸と一まの念仏唱立て　野坡

三人ながらしあはせよき者　執筆

春之部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉

東雲やまづ戸あけて門の松　渭子

みちのくの岩手の関も飾る家の海老　松風

春や祝ふ丹波の鹿も帰るとし　京 去来

かはには任も筆さし今朝の春　伊予 西秀

いうのしきまをき蓬乃かききちのま　洒堂

谷つゝや末首乃にあひの櫓あ　岱水

松いさゝ門清堵の兵祝ひ　沾圃

目下にも中の月や年の明　孤屋

神り乾家蓬立とつまをや　利牛

春松の敷乃名て来る清水　野坡

梅

梅一木つれなし草乃庵かな　露沾

むめ咲や臼乃挽木のよきまがり　曲翠

むめの香の筋に立よる初日哉　支考

窓乃うちをみことに

むめちるや糸乃光の日の匂ひ　伊賀 土芳

梅咲て湯殿の嶺もなだれ哉　利牛

赤みうて咲んはやきむめの花　濁子

みそかして咲るらうを梅の花　野坡

ね梅もと娘添女する書戸張　杉風

おそろしきものゝちくはたやすをみて

さて夢も顔に白つる紅粉乱　其角

七草や粧ひしかけて切刻を　野坡

うちむれて水のたな橋に睡る也　仙杖

はせを乃文字なしに

朧月一足つゝもわかれかな　去来

大はらや蝶乃出てまふ朧月　僧 丈艸

おほろ月まつたなき夜は闇の中哉　仙花

深川乃庵にて

長閑さや雲乃ゆかりも三ヶ一　利牛

十五日立や朧月乃古手賣　大坂 之道

猫乃恋初手から啼て哀也　野坡

ねこ乃子乃くんつほくれつ胡蝶哉　其角

鶯

うくひすは手洗ひと息する気ハ　嵐雪

鶯や茶をしへん寿の文　其角

うくひす乃声に雛雀哉　桃隣

うくひすや川をへたてゝ互鼓貢　野坡

鶯ふんつまりも念を入られ　利牛

柳

こねかへもつらして柳柳かな　湘春

障子こし月乃なひかふ柳かな　素龍

玉人のもちうけてきかへる柳かな　野坡

せきれいの尾を見付る柳かな　一風

町なかのくさかりし宿見る柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

たちこぬ籬にちるや椿かな　孤屋

枝もく傾ぬ花を椿かな　湖夫

念入て冬からつほむ椿かな　曲翠

寝[illegible]りうときめみせて[illegible]つききき
[illegible]のおもかす家[illegible]乃[illegible]梅
[illegible]掃除[illegible]く[illegible]梅[illegible]に[illegible]

冬

[illegible]乃[illegible]ん[illegible]まわ待しけんし
幕[illegible]法[illegible]もの[illegible]小[illegible]く乃
[illegible]法[illegible]し[illegible]な[illegible]け[illegible]

[illegible]乃松かげをたのみて
[illegible]川ごき乃[illegible]ろ[illegible]ぬ[illegible]ん心に　芭蕉
[illegible]しや出で[illegible]ん乃[illegible]めしも　秋風
[illegible]くと来て八[illegible]乃[illegible]に　丈艸
伊まし乃かりの夏花
[illegible]ん[illegible]待りて
中下もこれお盆乃[illegible]ん[illegible]　[illegible]
[illegible]むきをうらを突あらせ　去来
雛めし乃海を行[illegible]庵の[illegible]　孤屋

めすと云はまん乃宵あり清水　刑口
たをれても花のこゝろはなえみ　剣巌
柳乃影影ゆすわ水すや雲の中　少枝
牡丹すく人もやなんそさそふらん　湖春
あらこなりと花け五戒乃桜かな　其角
花さよも毛忠に本なし家桜　嵐雪
やまさくらちるや小川乃水車　大津あま　智月
黄僧も影影ころきなき花みえみ　大坂　之道

誰舟り花に珠数くる遠さかな　祐甫
山桜小川花こに跡なくへみ　伊勢福井　曽令
昆布だしや花よきのつて座敷望　利牛
おちつきそ気やまま世や桜かな　仝
折る桜てふてや嵐不　孤屋
よふまてあそふりなくて花みえみ　野坡
会乃附みるあつまるもしかさかな　仝

上巳

帝ほとに川乃なかるゝ塩干哉　沾徳

昼毎り さかしや見しこの桃乃花　桃流

うつきさ乃神そいつまうおの雛　其角

罌乃子に瓶を居るも ひな哉　この如竹

日半路をてられて来るや桃の花　野坡

麻乃袴あかね踏る 桃乃華　利牛

藪垣や こ乃息子すくれ乃花　孤屋

青柳乃泥にしたるゝ塩干かな　芭蕉

題しらず

濡つほり今おこむ小あめ哉　嵯峨田夫 為有

はる雨や蜂乃巣つたふ屋ね乃漏　芭蕉

藪あけるつくしの薹や二三本　子珊

ほろしとこみ焼門のつとめ哉　岱水

きのりやけ乃く深や風乃末　伊賀人 猿雖

寺よき茶の香乃嵐哉　仙華

能りりて

法度場の垣より内ハすまふ哉　野坡

此集いまた半なる比孤屋旅立

中河りの心品川まてみ送りし

雲霧やところまて月もおなし事　野坡

梅まちて晦日月をまちかね　利牛

夏部之發句

首夏

塩うをの裏ほす日也衣かへ　嵐雪

衣かへ十日はやくも旅ゝの有　野坡

綿をぬく襟ねハせりし衣更　九節

雀よりやれき姿や衣かへ　雪芝

茶乃後けさたよほとの蕗り哉　子珊

扇風乃跡篭白し衣かへ　利牛

うの花

卯花やくらき柳乃及こし　芭蕉

うの花の絶間たゝかん闇の門　去来

旅行

うの花に芦毛の馬の夜明哉　許六

卯花に扣ありけるやかつらけ　支考

鶯しらす

棹乃頭そやそ涼しめしりの　湖春

蓮字紙池の苧ある心のまゝ　常堂

うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

吹きてそ二階にね覚ほとゝきす　桃隣

ほとゝきす一二の橋の夜明かな　其角

竹焼を月見車にきくほとゝきす　嵐雪

桃灯の空に絶なしほとゝきす　杉風

木かくれて茶摘も聞やほとゝきす　芭蕉

きき雲やあなうしやる子規　素龍

此鳥啼く〳〵雨になる　利牛

子規顔の出されぬ格子哉　野坡

麦

掃ちに麦穂いやしや作どり　三の荊口

麦乃穂と丸にうよや篠波山　千川

麦浪出ん田植唄至き螢とむ　許六

苗の振りを門はゝまでさすて

刈こみし麦乃匂ひや宿の内　利牛

あそなし此まゝ

麦畑や出ぬけても猶麦乃中　野坡

ねなしこちらを

浦風やむらがる蝿のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付る小人形　其角

さうぶ葺くみせや法つきの風の色　大坂 洒堂

五日とも見ずみのあやめあやめかな　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをのやそ首の骨こそ甲着　仙花

帷子出し先ぬきさる袷かな　素龍

夏旅

笠松をみかけて町のあつさかな　卯七

枯柴に昼顔あつし足のまめ　斜嶺

二三番鶏は鳴ともあつさ哉　長崎 魯町

あけ山の力及ばぬあつさかな　桂雉

するがぢや花橘も茶の匂ひ　芭蕉
此句ハ嶋田よりの便り

蒲

五月雨

さみたれやとなりへ替る丸木橋　素龍

さみたれの色やよと川大和川　桃隣

さみたれに小鮒をにきる子供哉　野坡

五月雨や家乃茂みに蕗蒡（ヤマゴボウ）　山嵐蘭

よる八桃漂よりおてうしぬ

五月雨や龍も柱もものかな　岱水

涼

川中の根木によろふすゝみ哉　芭蕉

月影にうこく夏木や葉の光　女 羽紅

涼しさは壕よりさきの竹乃枝　長崎 卯七

川舩をたてそとさすすみ家　探芝

涼風をすかれて涼し茨の影　智月

すゝしさをちれと打の雲の本　伊賀 兀峯

すゞしさや浮洲のうへのざこくらべ　去来

夕すゞみあぶなき石にのぼりけり　野坡

三ヶ月に濁りてすむ[illegible]の水　素堂

[illegible]

橘や定家机のありどころ　杉風

[illegible]むしや磯菜すゞしき[illegible]　正秀

世乃中や手負[illegible]の水　里東

[illegible]

[illegible]　嵐雪

やすふきも[illegible]　許六

[illegible]の[illegible]　智月

[illegible]や人も[illegible]　小鼠

[illegible]のめを[illegible]　乙訓

[illegible]　丈艸

[illegible]の夕や[illegible]　仙花

こいされ蝶もうろつくわの垣に　　楚舟

まりうら蝶つゝ落す李の花　　残香

猪乃子にり帯ゝる茶子のはな　　乃有

閑寂侍町乃あつさかな　　也風

けうとむき鷺の挿や雨の暮　　祐甫

一枝をすけなき竹のなかの木　　仙花

竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　　嵐雪

さる人　伝ゝ酒をたしむるを
かたく禁めらひて　腹せしむるに
ある若にそれをとゞめて　あしき
あいわなると名付るかあゆをそれぬて
あらしせられくれを汗をうきて

洗て酒乃名あつてあけさふ　　利牛

ある人の発題よいさきなるやれきも
才知てあたをし見えつゝと
爪見るをなおめしかして

行雲をねてゐてみるや夏座敷　　野坡

[illegible]

指[illegible]

三